就学前の子どもをもつ女性の「個人化」を考える

横浜国立大学大学院准教授　相馬　直子

変化をデータで語ることは難しい。この調査は、就学前の子育て世帯を1995年から５年ごとに追いかけており、今回４回目を迎えた。1995年、2000年、2005年、2010年それぞれの時期に就学前の子育てをしている世帯を追いかけてきたことになる。こうした経年の調査にはまた別の調査手法もある。パネル調査（縦断調査）というが、同じ人を追いかけて、その人の変化や変化していないことを調べるものである。子育てでいえば、たとえば国が実施している「21世紀出生児縦断調査」というのがまさにそうだ。

子育ての環境はこの15年間で大きく変わったといわれている。「子育て支援」という言葉ひとつとってみても、この用語が厚生白書に登場したのは1989年と比較的新しい。また、「少子化対策」の一環として、子育ては社会で支援されるべきものという認識が広がってきた。

では、日々、子育てをする女性の意識面ではどういう変化があるだろうか。本稿では限られたデータの中から考えてみたい＊1。

家族をめぐる社会変動の議論で、「個人化」というキーワードがある。幼児の生活や子育てという本調査の趣旨に即して「個人化」を考えてみよう（ここでは結婚しない、子どもを生まない、というのはあえて問わないで個人化を議論したい）。第１に、意識の面では、家族のことで自分を犠牲にせず自分の生活は自分の生活として別立てで考える人が増えるという変化が考えられる。第２に、子育て以外のこと、たとえば、趣味やサークル活動、仕事をもつなど、子育てに専念する以外の選択肢をもちたいという人が増えるという変化も考えられる。

ではこの調査では、この２つの点についてどういう変化がみられるだろうか。

残念なことに、社会調査にはよくあることだが、調査第１～４回で多少たずね方が異なっているものもある。ここでは変化が追えるデータからその様相に迫ってみたい。

まず、第１回（95年）、第２回（00年）、第３回（05年）で、女性と仕事についてたずねている設問に着目しよう＊2。もっとも多い回答は、「仕事は持つが、結婚して子どもが生まれたら一時やめて、子どもが大きくなったらまた仕事を持つのがいい」（95年71.4％、00年69.9％、05年71.6％）で約７割である。次に多いのが、「結婚して子どもが生まれても、ずっと仕事を持ち続けるのがいい」（95年12.5％、00年15.5％、05年14.7％）で、約１割強が回答している。95年（第１回）から05年（第３回）の間に大きな変化はみられない（**表１**）。

しかしながら、05年（第３回）から10年（第４回）の間の変化はやや様相が異なっている。21世紀に入り、少子化対策や子育て支援という言葉も社会に浸透してきた。では、どういう変化であるか。

まず、「子育てに関するＡとＢの２つの意

＊１　本稿では、筆者の判断により無答不明を除外して分析しているため、報告書本文内の数値と一致しない場合がある。また、本稿では、１歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

＊２　第１回（95年）と第２回（00年）で、「現在、あなたは家庭以外の場で、個人としてやってみたいこと（仕事やボランティアなど）がありますか」とたずねている設問があるが、データ処理の関係で今回使用することができなかった。したがって、この設問で代替説明することとした。

見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか」とたずねている設問で、「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」が5.8ポイント増加している（05年37.6%、10年43.4%）（図表省略）。ここから、母親の意識レベルでの個人化が進行しているのではと思いたくなる。また、3歳児神話（3歳までは母の手で）を否定し、いつも子どもと一緒でなくてよいのだ、一緒にいるときの質が大切なのだ、と思う人が増えたということのあらわれかもしれない。

ただ、状況はそう単純ではなさそうだ。というのは、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と思う層が05年62.5%から10年55.3%と7.2ポイント減少している。意識レベルの個人化が進行しているならば、この数値は増加してもよさそうだが、そうではない。逆に、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」と思う層が、05年37.5%から10年44.7%と7.2ポイント増加している（**表2**）。同様に、もし意識レベルの個人化が進行しているならば、この数値は逆に減少していいはずだが、そうではない。

実際、東アジア5都市調査（2010年）でも、東京の母親は、他の都市（北京、上海、台北、ソウル）の母親たちと比べて、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」と回答した率がもっとも高く、かつ、「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」というスコアも高いという特徴をみせている（「幼児の生活アンケート・東アジア5都市調査 2010」レポート）。ここから、「いつも子どもと一緒でなくてもいいと思うが、現実問題、子どものために自分ががまんするのはしかたがない」というのが就学前の子どもをもつ母親たちの本音のようだ。

以上の変化は母親の平均値であるが、就業状況別にみると、常勤者、パートタイム、専業主婦のなかで、もっとも変化が大きいのは、誰であろうか。この変化を後押ししているのは誰なのか。それは、パートタイムの層である。「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」がパートタイムでは05年28.6%から10年41.1%と12.5ポイント増加している。パートタイムの層の変化は、常勤者、専業主婦の変化に比べて顕著であり、全体の約2倍の変化をみせている（表2）。

なぜだろう。「男性稼ぎ主型モデル」が崩れていくなかで、実際は、女性の非正規雇用が拡大している状況をふまえると、この変化は見過ごすことができない。子育てとパート労働との両立でいつもバタバタしていて、本当はもっと子どものために愛情をそそぎたいが、一緒にいる時間が十分にとれないため、一緒にいるときの質が大切だと自分に言い聞かせる気持ちのあらわれだろうか。また、本当は夫にもっとかかわってほしいが、夫の働き方や、果ては社会はあまり変化せず、結局自分にしわよせがきて、自分ががまんしてのりきるしかない、というあきらめの気持ちのあらわれだろうか。パートタイム層の大きな変化の裏に、何か大きな「変わらないこと」があるのだろう。

もちろん、実数の多さでいえば、依然として専業主婦層がトップではあるが、パート労働者の意識変化のゆくえは、今後、日本が「男性稼ぎ主型モデル」からどういう社会に変化していくのかを占ううえでとても大事な指標と考える。また、ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センという経済学者も論じているように、「生き方の幅」がどのくらいあるかが、その社会の福祉（潜在能力）をはかる重要なものさしである。そもそも「生き方の幅」を考えるうえでも、当事者が「自分の生き方を大切にしたい」と思っているかどうかは重要だ。こうした意味でも、就学前の子どもをもつ女性が「自分の生き方」をどう思っているかは、日本社会に生きる女性の「個人化」のゆくえ、果ては、福祉（潜在能力）の一端をはかる重要なものさしなのだ。では、次回の調査で、「自分の生き方」も大切にしたいと思う女性が増えているかどうか。この点に筆者はもっとも着目したい。

表１　女性と仕事についての考え方（経年比較）

（%）

	95年（1,641）	00年（1,537）	05年（2,111）
仕事はずっと持たない方がいい	0.7	0.6	0.6
仕事は持つが、結婚したらやめるのがいい	2.3	1.9	1.5
仕事は持つが、結婚して子どもが生まれたらやめるのがいい	7.2	6.8	5.0
仕事は持つが、結婚して子どもが生まれたら一時やめて、子どもが大きくなったらまた仕事を持つのがいい	71.4	69.9	71.6
結婚して子どもが生まれても、ずっと仕事を持ち続けるのがいい	12.5	15.5	14.7
結婚しないで、ずっと仕事を持ち続けるのがいい	0.1	0.4	0.5
その他	5.7	5.1	6.1

注１）母親の回答のみ分析。
注２）無答不明を除外して分析。
注３）（　）内はサンプル数。

表２　母親の子育て観（母親の就業状況別　経年比較）

（%）

	全体			専業主婦			常勤者			パートタイム		
	05年（2,230）	10年（2,821）	５年間の変化	05年（1,558）	10年（1,601）	５年間の変化	05年（213）	10年（403）	５年間の変化	05年（248）	10年（458）	５年間の変化
A．子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	62.5	55.3	−7.2	58.9	50.7	−8.2	69.1	65.0	−4.1	71.4	58.9	−12.5
B．子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	37.5	44.7	7.2	41.1	49.3	8.2	30.9	35.0	4.1	28.6	41.1	12.5

注１）母親の回答のみ分析。
注２）無答不明を除外して分析。
注３）（　）内はサンプル数。